小山内薫氏

中村武羅夫

小山内薫氏

小山内薫氏は大学出の小説家である。何かの雑誌で、其写真を拝見した時には、余程ハイカラのようにお見受け申したが、会て見ると全で子供である。頭なぞ坊主刈りで夏のことであったが、筒袖の浴衣を着て居られた。多分年は二十七八、稍々三十近いことと思うが、打見た所二十二三ぐらいの書生のようである。卑俗に男は年より多く見えて、女は年下に見られるのが好いと云うが、那様ことは何うだか分らない。兎に角、年よりは若く見

える。

目の切れの好い、鼻の高い、顔の整った人である。些っと見た所は、極く真面目な人で、別に才子風な所はない。鼻が悪いと見えて、何うかすると声が鼻にかかる。態度に気取ったり済ましたりする厭味がないのが、余は何より好きである。

薫氏は其作物に見るが如き、才走った人ではない。接して見て文士らしい匂いもない。見た所何うしても事務家か、或は新聞記者である。人物に、白鳥氏とか、青果氏に見るが如き、一種特殊の点がない。如何にも普通の

人らしい。

余は、薫氏を以て、文士と云うよりも、寧ろ一種の事務家と信ずる。文士としての成功よりも、事務家としてより以上成功される人であると思う。其創作の才よりも、寧ろ事務の才に長じた人であると思う。

余は、薫氏の生れ乍らにして、作家たるの天分豊かなるや否やを疑う。其才で小説を作る人であると云うのは、薫氏の定評である。余も薫氏の小説を読む毎に、而く感ずる所の一人である。

其小説を才で拵らえると云う。然し、或る事件なり、

人物なり、書く材料其物までを才で拵らえると云う意味ではない。或る人物、或る事象に対したる時、何物かを感じ得た時に、直ちにそれを材料として、其人物、其事象、其感じを書かれるに違いない。其所までは他の作家と毫も変りはない。然し、薫氏の小説に才を弄したるの跡を見るのは、観察、及び取材に非ずして、描写にあると余は思う。即ち、観察も、取材も、材料に対する感じも、書かれるものも、必らず薫氏自身の真に見、而して感じられた所に、違いない。而も出来上った小説に、其才気を弄したるの跡を何れの作物に於ても見るのは、薫

氏の筆を執る時の態度――心持にあると思う。或る事象を観察し、或る材料を見て、或ることを感じた時、薫氏は先ず、此の材料を如何にして描き、如何にして好き小説とせんかと云うことを考えられる。此の如何にして好き小説となさんかと云うことが、薫氏の真実感じたる所を描いた作物でも、出来上った所を見ると、才を弄したる跡の見ゆる所以である。即ち、薫氏の創作に対する態度は、如何にして此の材料、此の感じを偽らずして、真に描写せんかと云うよりも、如何にしてすぐれたる小説とせんかと云う考えが勝てる故に、出来上った小説は、

作者の真実なる感じは出ないで、才を以て拵えたらしく見ゆる所以であると思う。充り、分れる所は筆を執る時の態度――と云うよりも、小説其物に対する態度にあると思う。

余の薫氏を以て、作家たるの天分如何を疑って、寧ろ事務家として才を推奨せしむる所のものは、其所にある。即ち薫氏は小説を書き度くて堪らず、書かざるを得ずして書くの人ではない。多読した結果、蓄えたる所の小説に対する智識を応用して、自己の感じを書く人である。感ずる人であるかも知らないが、余は、薫氏の描写の天

分如何を疑う。従来薫氏の作物の描写を見ると、薫氏自身の自らなる天分を其中に多く見出すことが出来ない。多読の結果、頭の中に収められたるあらゆる小説の形式を借りて、自分の見た所、感じた所をその形式に当てはめて現わす人である。故に形式が第一になって感じは第二になる。従って、其作物は如何にも才を以って拵えたように見ゆるのだ。

日本文学電子図書館

現代文士廿八人

著　者：中村武羅夫
制作者：宮澤一郎
出版社：日高有倫堂
明治42年７月10日 印刷
明治42年７月16日 発行

日本文学電子図書館